

教育活動全般で育む資質・能力を明示し、生徒に高い自己肯定感を醸成する

山梨県屈指の進学校として高い評価を得てきた山梨県立吉田高校。その実績に慢心することなく自校の課題をいち早くキャッチし、自己肯定力を始めとする、生徒が3年間で身につけるべき力を学校教育目標として掲げるとともに、授業から学校行事まですべての教育活動の改善へと乗り出した。

「できて当たり前」に潜む新たな課題に気づく

山梨県では、2007年度から公立高校の入試が全県一学区制となった。それまでも県東南部の中核校として有為な人材を送り出してきた山梨県立吉田高校には、地域の各中学校の上位層が集まるようになり、ここ数年も進学実績を順調に伸ばしてきた。そして、17年度入試において、東京大学の合格者を、県内最多となる現役9人を出すに至った。

地方公立高校として着実に地域の期待に応えてきた同校だが、かつて

教頭として同校に勤務し、17年4月に新校長として赴任した高保裕樹校長は、近年の学校環境の変化を敏感に感じ取っていた。

「多くの生徒は中学校時代、優秀であったため、『勉強はできて当たり前』といった感覚で高校生活をスタートさせます。しかし、新たな集団の中で順位がついていき、下の層の生徒は自信を失ってしまいます。すべての生徒が本校での3年間をよりよく過ごすためには、学力だけでなく、多面的に生徒の成長を認める教育目標が必要だと考えました」（高保校長）

同校には、「百折不撓」「純剛」と

いう設立以来の校訓と、「Yoshida PRIDE」というキャッチフレーズがあり、生徒たちに愛されてきた。だが、「Yoshida PRIDE」が日々の高校生活の中でどのような態度や資質を示すのかは、教師や生徒個々の解釈に委ねられ、その具体的な評価も行われてこなかった。

「本校では『百折不撓』『純剛』を校訓に、『質の高い文武両道』を校風に掲げてきましたが、実はそれらは手段でしかありません。生徒一人ひとりが自分の成長を実感できる目標、すなわち、私たち教師が授業から学級経営、部活動や学校行事に至

るまで、そこでのようなことができる生徒を育てるのかを常に意識できる教育目標を打ち立てようと考えたのです」（高保校長）

高保校長は、自らの思いを古屋勇人教頭、小俣義一教頭に打ち明けた。「私たちが『生徒にはこうあってほしい』と考えてきたことは、実は目標ではなく、むしろ手段ではなかったのかと校長に言われ、正直はっとしました」（小俣教頭）

「校長と話す中で、変化の激しい時代を生きるために必要な力は何かを十分に吟味して、それを教育目標として掲げる必要性に気づきまし



山梨県立吉田高校
舟久保 豊 ふなくぼ ゆたか
 教職歴24年。同校に赴任して10年目。1学年主任。「人生一度、教師も生徒ももっと成長できる」



山梨県立吉田高校
飯室 毅 いむろ こし
 教職歴27年。同校に赴任して8年目。進路指導主任。「信念を持って高い志を貫く姿を生徒に示す」



山梨県立吉田高校教頭
小俣義一 おまた よしいち
 教職歴30年。同校に赴任して2年目。「失敗を恐れず、最後まで諦めない心を育てる」



山梨県立吉田高校教頭
古屋 勇人 ふるや はやと
 教職歴32年。同校に赴任して1年目。「千里の道も一歩から」



山梨県立吉田高校校長
高保裕樹 たかは ゆうき
 教職歴34年。同校に赴任して1年目。「生徒の可能性を信じ、全力で、できる限りの支援をする」

高保校長は赴任後すぐに、両教頭と教育目標の検討を開始。「Yoshida PRIDE」を「何事にも自らの考えを持って主体的に臨み、他者を尊重するしなやかな心」と、その意味を明確にした上で、高校3年間を通じて

社会で生きる資質・能力を評価し、自己肯定感を育む

た」（古屋教頭）

山梨県立吉田高校
 ◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。総合的な学習の時間の中に「富士山学」を設定し、探究学習を行う。ウエイトリフティング、ラグビーなど部活動も盛ん。
 ◎設立 1937（昭和12）年
 ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
 ◎生徒数 1学年約280人
 ◎2017年度入試合格実績（現役のみ）
 国立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、大阪大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ569人が合格。
 ◎URL <http://www.yoshidah.kai.ed.jp/>

育てたい力を、教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」として明文化した（図1）。吉高GPで示されている8つの力は、AI（人工知能）が発達し、グローバル化が進む激動の時代を生き抜き、未来を切り拓くために必要な力であり、なおかつ、教師間・生徒間で解釈が異なることがないよう、生徒の「行動ベース」として具体的にイメージできるような表現・記述とした。また、「資質・能力ベース」とすることで、授業や教科学習だけではなく、学校行事や部活動など、すべての教育活動における共通の目標とすることを目指した。

図1 山梨県立吉田高校の学校教育目標「吉高GP」

教育の目的

「Yoshida PRIDE を持って 未来を生き抜くことができる生徒を育成する」

- Yoshida PRIDE …… 何事にも自らの考えを持って主体的に臨み、他者を尊重するしなやかな心
- 未来を生き抜くには …… 過去に学び、現在を知り、未来を考える手法を学ぶことが必要です

教育の目標

吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）
 この目的を達成するため、本校の3年間を通して次の8つの力を身につけることを目標とします。

- 1 自己肯定力 達成感を積み重ねることで、自信をつけます
- 2 傾聴力 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます
- 3 分析力 事実を客観的に分析する習慣を身につけます
- 4 思考力 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます
- 5 発信力 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます
- 6 想像力 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます
- 7 創造力 課題を解決する方法を創造する力を身につけます
- 8 行動力 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます

教師・生徒、いずれにおいても、これまでそれぞれの解釈で捉えていた「Yoshida PRIDE」の意味を明確化

抽象的であった教育目標を資質・能力の形で具体化

次期学習指導要領でも示されることになる資質・能力の柱の「判断力」や「表現力」などを、さらに細分化

上記の目標を設定したねらい

- 学力だけでなく、多面的に生徒の成長を認め、生徒の自己肯定感を高める
- 教師間・生徒間で教育目標の解釈が異ならないようにする
- 授業や教科学習だけでなく、部活動や学校行事も含めたすべての教育活動において、目的、評価・振り返りの視点、改善の方向性を明確化する

上記の目標を設定したことによる効果

- 授業だけでなく、学年集会などでも生徒たちの主体性の高まりが見られた
- 学校教育目標を踏まえた、高校生活全般を評価するルーブリックの案が教師から主体的に出された
- 数字に表れない生徒の変化や成長を評価するようになった

「吉高GPは、8つの力で表されていますが、私が特にこだわったのは、自己肯定力を最初にうたうことです。今の生徒たちにこそ、成績だけにとらわれない広い視野で、自分の、そして仲間の持つ輝きに気づいてほしいと思いました」（高保校長）

教育目標の中に「進学校」という文言を盛り込まなかったのも、「大学に進学すること」だけを高校生活での目的・目標にしてほしくないという、高保校長の教育観に基づく判断である。

進路指導主事の飯室毅先生は、『『進学重視』などと掲げて、高校生活の過ごし方を生徒に押しつけてはいけない。多様性を認め合う学校にしたい』という高保校長の言葉に、大きな刺激を受けたという。

「校長からは『進路指導部として、社会の変化と多様な進路希望に対応できる体制を構築してほしい』と言われました。校長が、大学進学を否定しているわけではないことはすぐに理解できました。難関国立大学に進学を希望する生徒も、就職を希望する生徒も、あるいは今後出てくるであろう海外大学に進学を希望する生徒も、自分の夢を堂々と語るこ

ができる雰囲気をつくりたい。そして、すべての生徒の希望をかなえるために全力でサポートする学校でありたいと思いました」（飯室先生）

吉高GPは主任会議、職員会議と検討の場に出されていった。高保校長は職員会議で、「吉高GPが策定された暁には、一つひとつの教育活動において、それが本校の教育目標のどの力の育成を目指している活動なのか、生徒にしっかりと伝えていただきたい」と、教師全員に訴えた。

「各教育活動で、それぞれのような力を身につけさせたいのか、教師が同じ言葉で具体的に生徒に語ることであれば、教育効果はますます高まるでしょうし、今回は何が達成できて、何が達成できなかったのかが明確になり、次回以降の改善がスムーズになるはず。さらに、各学年の生徒の特性と照らし合わせながら行事の進め方などを工夫することもできますから、学校の取り組みが機械的な前年踏襲に陥ることもないでしょう」（古屋教頭）

個々の教育活動の目的が「暗黙の了解」の状態では、振り返りは運営上の問題にとどまってしまう。目的ののちのちの振り返りのためには、

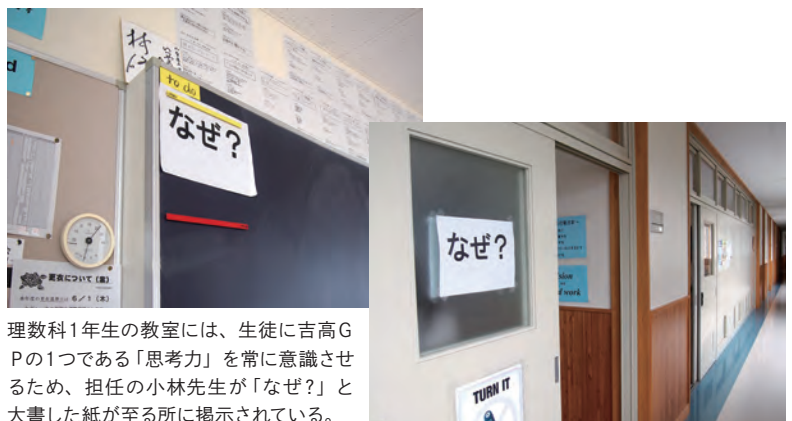
取り組みの目的の言語化が不可欠であり、そのよりどころとしての役割が吉高GPに期待されているのだ。

学校の諸活動を横断的に評価し、つなぐツールに

策定された吉高GPを、高保校長は生徒、保護者に対して積極的に発信した。全校集会では、生徒に「今後は、行事に臨む時に、その行事を通して自分は吉高GPのどの力を伸ばすのかを意識し、それが分からない時は先生に聞いてください」と語りかけた。さらに、「もしも答えられない先生がいたら、私に教えてください」と笑顔で続け、生徒、教師に吉高GPの大切さを訴えた。

「保護者総会で吉高GPの説明を受けた保護者から、『学校では、人間力を育てようとしているのですね』と言われたのは、うれしかったですね。今後、吉高GPを基に、『この行事ではこの力の育成を重視しています』と担任がその都度お伝えすることで、さらに保護者も関心を持つてくれるはずです」（小俣教頭）

吉高GPを踏まえ、授業改善も進んでいる。まず、高保校長が平素の



理数科1年生の教室には、生徒に吉高GPの1つである「思考力」を常に意識させるため、担任の小林先生が「なぜ?」と大書した紙が至る所に掲示されている。

授業観察で活用するチェックシートを、吉高GPの観点で見直し、全教師に配布した。その結果、日々の授業で、教師が8つの力の育成を意識するようになった。

「早速、傾聴力、分析力の大切さを実感できるグループワークを、国語の授業で行いました。類似の活動を今までにも行ったことはありますが、大きく異なるのは、8つの力のどの力を育成するのかを明らかに意

図2 吉高Gグループリック

		GP評価(5月)				評価
		S	A	B	C	
GP力	傾聴力	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、自分の気持ちを伝えることができるようになった。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、自分の気持ちを伝えることができるようになった。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、自分の気持ちを伝えることができるようになった。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、自分の気持ちを伝えることができるようになった。	
	思考力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	発信力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	創造力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	想像力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	行動力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	分析力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	自己肯定力	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	学習習慣	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
	生活習慣	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、自分の考えを修正することができるようになった。	
		S5点	A4点	B2点	C1点	
		1年()組()番 氏名()				/50点

1学年主任の舟久保先生が作成した1年生5月の吉高Gグループリック。これは舟久保先生が作成した試作版であり、今後管理職を中心に吟味した上で、実践に移る。

識した上で取り組むようになったこととです。アクティブ・ラーニングの視点の導入が進むほど、大学入試のその先でも生きる力として、8つの力を強く意識するようになるでしょう」(飯室先生)

1学年主任の舟久保先生は、吉高GPの8つの力を自己評価できるグループリックを作成した(図2)。「第1回定期考査を終えた後に、学校活動全般について、吉高GPの観点で自己評価してもらおう予定です。定期的に自己評価を行うことで、生徒が自身の変化を把握できるようにしたいと思います」(舟久保先生)

このグループリックは、舟久保先生

が自発的に作成した。学年団の長として、授業、行事での生徒の成長を吉高GPの観点でつなげようと自ら挑戦していることに、「先生方が主体性を発揮していることがうれし」と、高保校長は目を細める。

「これまでは、『本校の生徒であれば、高いハードルを越えて当たり前』という気持ちでが私自身、強すぎた」とい

学校教育目標は「どう育てるのか」という教師への問い

吉高GPを策定しておよそ2か月。短期間のうちに生徒、教師双方に様々な変化が見られたという。

「今年度の生徒たちは見事だ」と我知らず口にすることもあるという。

「応援歌指導や富士登山強歩大会など、先輩から受け継いだ伝統行事においても、教育目標の8つの力が育まれることを、教師は生徒に明確に語れるようになりました。その結果、生徒も担任も、順位だけでなく、プロセスに表れる姿勢や態度を評価するようになりました」(飯室先生)

高保校長も、生徒一人ひとりの中にある「数字では表せない素晴らしい

思いです。しかし、結果だけに注目されては、生徒は苦しくなってしまう。8つの力を意識してからは、結果は出ていなくても頑張っていること、ハードルを越えようという試行錯誤することも評価したいという気持ちが強くなりました」(舟久保先生)

元々、行事が盛んで、上級生が下級生を導きながら生徒が主体的に活動する文化を持つ同校だが、全校生徒が集まった練習などでは、生徒はこれまで以上に教師の指示を待つことなく、自ら考え、動くようになってきた。また、学年集会でも、目的を自覚して話を聞こうとするため、下を向く生徒が少なくなった。自校の生徒を見慣れているベテラン教師が、

「文武両道を掲げても部活動をやるめる生徒はいますし、百折不撓をうたっても大きな挫折を経験する生徒もいます。それでも日々を生きる生徒にとって、吉高GPは常に学びの指針となるはずで。吉高GP、すなわち教育目標は、『目の前の生徒をどう育てるのか』という学校から教師への問いかけであり、その問いに対する我々の答えが日々の教育活動だと思えます」(舟久保先生)

「さ」を、教師が確実に評価することの大切さを強調する。

「例えば、きちんと掃除をすることも、8つの力に確実に関連します。校長としては、そうした生徒の地道な努力に光をあて、積極的に表彰していきたいと思っています。ただ、そのためには、先生方に生徒のよいところを丁寧に見つけてもらわなければなりません。教師集団全体で生徒のよいところを見つけ、一人ひとりに高い自己肯定感を醸成したいと思えます」(高保校長)

今年度末までには、吉高GPを評価するテストを開発したいと話す高保校長。すべての生徒に光をあて、自己肯定感を育む学校づくりへの決意は、各教師にも共有されている。